



NPO法人ジェントルハートプロジェクト

ジェントルハート通信

No.51
2016年夏号

発行：NPO法人 ジェントルハートプロジェクト 発行日：2016年6月5日 価格：100円（会員無料）
URL：<http://npo-ghp.or.jp> Tel. + Fax. 045-845-3620（小森）

「七回忌を迎え、今思うこと」

理事 篠原 真紀

2010年6月7日、最愛の息子、真矢（まさや）を失いました。つい最近のような気もするし、遠い昔のような気もします。今年は七回忌法要を迎えます。友人や保護者の方々、ご近所の方々、小学校や中学校の先生、事件当時にお世話になった教育委員会の方。70人ほどの方々からご出席のお返事をいただいております。本当にありがたいと思うと同時に、これだけ多くの方に愛されていた子が、もういないのは本当に辛く悲しいことです。

今回は理事としてではなく、ひとりの母親として書かせていただきたいと思えます。真矢はシャイで不器用で、でも芯のしっかりとした子で、将来は人の役に立つ仕事に就きたいと警察官になることが夢でした。大好きな友だちがいじめに遭い、それをかばっているうちに自らも標的とされてしまいました。自身へのいじめが無くなった後も、標的を替えてはいじめを繰り返す加害生徒達を許すことができず、命を賭して訴えた告発のような死でした。当時私は理解ができずに、「その正義をもっと違う事に使って欲しかった！何も死ぬことなんてないじゃない！」と怒りに近い感情がありました。しかし今なら真矢の気持ちが少しは解るような気がします。いじめという悪魔と必死で戦いながら、友人を守ろうとしたけれど、結局は何も変えることができずにいる自分。私を含めて、真矢の心の奥までくみ取ってあげることで

ない大人たちへの絶望と怒り。どれ程の苦しみを抱えていたのだろう。遺書の最後にこう綴っています。「きみのため 尽くす心は水の泡 消えにしあと 澄み渡る空」。自分の命と引き換えに、この世からいじめが無くなって欲しいと思ったのではないのでしょうか。そんな息子を今では本当に誇りに思うし、真矢の遺志は絶対に継いでいかなくてははいけないと心に誓いました。

そんな私ですが、やはりどうしても辛くて、逢いたくて涙する日もあります。そんな時にはいつも主人にこう言われます。「亡くなった子は決して親を苦しめるために生まれてきたわけじゃないよ。だから、辛い、悲しいとばかり言っていたら真矢が可哀想だよ。」と。その通りだね、14年という短い年月しか親子でいられなかったけれど、たくさん思い出を作ってくれたね。その思い出があるから生きていけるんだね。そう考えたら親でいさせてもらえたことに感謝の言葉しか出てきません。それに真矢が繋いでくれたご縁というものも忘れてはなりません。どれだけの人に助けて頂いたか……。忘れもしません、四十九日の法要で親戚がまだ家にいる時でした。ジェントルハートプロジェクトの理事である大貫さんと武田さんがいらしてくれました。どうしたらいいか何も考えられずにいた私達夫婦に優しく且つ冷静にアドバイスをしてくれた武田さん。真矢の遺書を涙を流しながら読んでくれた

大貫さん。会ったこともない子に思いを馳せて泣いてくれる大人がいることに感動したのです。なんて優しい人たちなのだろうと。今でもあの時に寄り添って頂いたことは忘れません。

そして、今度は私が寄り添う番です。悲しい事ですが、この6年間で新たなご遺族たちとも出会いました。地獄のような苦しみも我がことのように分かります。一緒に泣くこともあります。そしていつも心掛けているのは「決して一人じゃないよ」と言い続けること。いつも下を向いて泣いてばかりいたお母さんが、笑顔を見せながらお子さんとの思い出話をしてくれるのは嬉しいものです。理事の小森美登里さんと私との合言葉「目指せ明るい遺族！」。この言葉の意味は、辛いのは当たり前、でも死ぬほどに追い詰められた我が子の苦しみに比べたらどんなことでも越えていける。泣いてばかりいたらあの子に申し訳ない。笑顔で前に進もう！というものです。

今年の1月には成人式を迎えるはずでした。親友が真矢の写真を携えて式に出席してくれました。どんな大人になっていたのかなと思いを巡らせることしかできません。でもきっと、高い高い空の上からいつも見てくれているような気がします。お母さんのやっていることは間違っていないよね？と心の中で問いかけます。いつか再び会う日が来た時に、その答えを聞きたいと思っています。

子どもの貧困に思うこと、取り組むこと

理事・事務局長 青山 正彦

2015年版「幸福度調査」を発表

国際機関の経済協力開発機構(OECD)は昨年10月に加盟国36ヶ国を対象とした「2015年度版の幸福度調査」を公表しました。

驚くことに日本の「子どもの貧困率」はOECD平均を上回っており、子どもの貧困率が、36か国中11番目に高いという内容です。

調査によれば、日本の子どもは読解力などの「学習到達度」は加盟国の中で最高水準にあり、「乳幼児死亡率」も低くなっていますが、子どもの貧困率は15.7%とOECD加盟国中11番目に高く、平均(13.7%)を上回っています。

また、親と過ごす時間は1日あたり約109分で、OECD平均の150分より大幅に少ないことも明らかになり、この調査項目も大変気がかりです。

子どもの貧困率、27年で5ポイント超上昇

豊かになったと誰もが思っていた日本、貧困なんてこの平成の時代にと、まったく他人事の方も多くいるはずですが、子どもの貧困率は間違いなく上昇しています。

厚生省によると、1985年に10.9%だった「子どもの貧困率(表:貧困率の年次推移)」は2012年に16.3%まで上昇。また、2009年までは子どもの貧困率は全体の貧困率よりも低かったが、2012年は逆転し、2012年の子どもの貧困率は16.3%と、相対的貧困率16.1%を上回っています。

北欧諸国は子供の貧困率が低い

世界における子どもの貧困率はどうなっているのでしょうか。

今回の調査によると、OECD加盟国で子どもの貧困率が最も高かったのは、イスラエル。

一方で、デンマークやアイスランドなど、共働きしやすい家族支援を優先して施策を実施した北欧諸国では子どもの貧困率が低くなっていました。

「格差が子どもの機会を奪う」と指摘

OECDは、人生の満足度や読解・問題解決能力、将来の選挙投票意思という点でも裕福でない子どもの方が低い結果が出ているとして、両親のレベルで拡大している格差が、子どもの機会を奪ってしまう状況になっていると指摘しています。

は子どもの貧困対策について、地域全体で考えてもらおうと足立区が開いたもので、会場には、およそ400人の住民が集まりました。

はじめに去年、小学1年生の子どもがいる区内の家庭を対象に行った生活状況に関するアンケートの結果が発表されました。それによりますと、アンケートに回答した家庭のおよそ4分の1が保険料の支払いが難しいなど、生活が困難な状況に陥っている一方、相談相手がいるなど、社会的なつながりがあれば、子どもの健康や生活に悪い影響を及ぼす確率が低いということです。

この結果を受け、近藤区長は「経済状況が厳しい家庭が地域で孤立しないよう近所で声をかけ合ったり、子どもを積極的にほめたりして、みんなが安心して子育てができる地域を作り上げていきましょう」と呼びかけました。

参加した70代の男性は「マンションに住んでいるが、知らない子どもや母親にも何気ない会話をするなど心がけている。孤立してしまう人が出ないよう地域で、できることから始めたい」と話していました。地域住民が、自分たちの住む地域の親や子どもたちに目を向け、対話・交流など様々な機会を捉えて支える取り組みが始まっています。

子どもの貧困対策でシンポジウム

5月に東京・足立区は、子どもの貧困対策を考えるシンポジウムを開き、近藤やよい区長が、経済状況が厳しい家庭が地域で孤立しないよう近所で声をかけ合うことの大切さを訴えました。

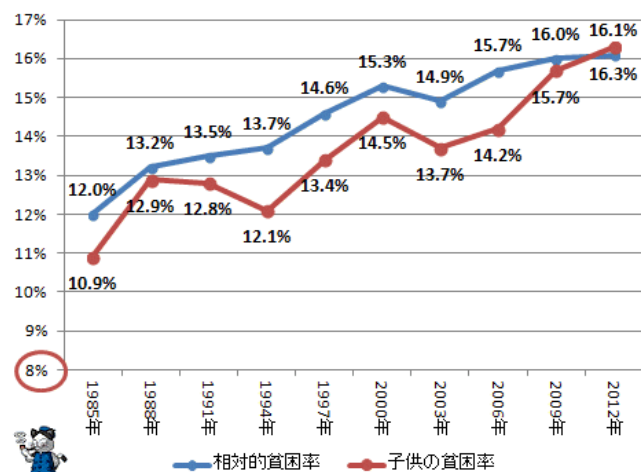
このシンポジウム

貧困児童に学びの機会を

貧困の背景には格差の拡大があります。離婚などによるひとり親世帯の増加に加え、政府が規制緩和を進める中で、企業が正社員を減らし、賃金の低い非正規労働者を増やしてきたことが貧困率を押し上げているのです。

例えば、小・中学校では給食や学用品、修学旅行などの費用を市区町村が肩代わりする「就学援助」を受ける子どもが増えています。

貧困率の年次推移(国民生活基礎調査より)



(出所:厚生労働省)

平成 24 年度は 155 万人にのぼり、少子化で子どもの数が減っているにも関わらず 15 年で 2 倍に増え、小・中学生の 15%あまりを占めるようになりました。また、子どもの健康への影響も懸念されるようになっていきます。

厚生労働省の研究班が、小学 5 年生 900 人あまりに行った調査では、「休日に朝食を食べない」または「食べないことがある」という子どもが 27%、「インスタント麺を週 1 回以上食べる」という子どもが 26%と、いずれも 4 人に 1 人にのぼり、貧困世帯以外の子どもより 10 ポイントほど多くなっています。

この調査では貧困世帯の子どもの食事はコメやパン、麺類といった炭水化物が多く、肉や魚のたんぱく質やビタミン、ミネラルが不足していることもわかり、食生活や栄養に偏りがあることが明らかになりました。

また、貧困問題の研究者のグループが小・中学生あわせて 6,000 人あまりに行った調査では、親が子どもを病院に連れて行った方がよいと思いつながら受診させなかったケースが 1,200 人あまりでありました。

そして、このうちの 128 人は「医療費の自己負担金を支払えない」という理由で受診を控えています。このように、育ち盛りの時期に必要な栄養を取ることができない。病気になっても病院に行くことができない子どもが豊かになった日本にも存在し、貧困率の上昇で、さらに増えることが懸念されているのです。

これらの日本の子供の貧困率が高い状況については、海外でも注目されています。「子供の貧困対策大綱」に関する日本の新聞報道を海外メディアが紹介している例もあります。

この大綱は、子どもの将来が生まれ育った環境で左右されたり、貧困が世代を超えて連鎖することを断ち切るという基本方針を打ち出しています。重

点施策は、「教育支援」「生活支援」「保護者への就労支援」「経済的支援」等ですが、主な取り組みとしては、学校を「子供の貧困対策のプラットフォーム」と位置づけ、スクールソーシャルワーカーが貧困問題や児童虐待などの相談に応じる。スクールソーシャルワーカーを現在の 1500 人から 1 万人に増やし、経済支援を受けている小・中学生の割合が高い地域に重点的に配置するとしています。

経済的な事情で勉強が遅れがちな中学生に対しては、大学生や元教員らのボランティアが放課後や週末の空き教室で、教材費を除いて原則無料で勉強を教える体制を整える。無料補習制度がある中学校を現在の 700 校から 5000 校に増やす計画です。

少子高齢化問題の方が深刻

OECD や厚生労働省調査の貧困率は、絶対的なものではなく相対的なものです。子どもの貧困率も相対的な数字であり、絶対的に深刻なのは少子高齢化問題であるという海外メディアの意見もあります。

日本の人口は、どの先進国よりも急速に減少し高齢化している、とフォーブス誌電子版で指摘している通り、2013 年に総人口は 24 万 4 千人減少しました。日本国民 1,000 人当たり、新生児が 8.2 人誕生したのに対し、10.1 人が死亡した計算になります。国連では、日本の人口は今日の 1 億 2,700 万人から、2040 年までに 1 億 1,500 万人に減少する予測しています。

また記事では、政府の福祉政策の焦点を、熟年層から若年層にシフトし、特に子どもがいる世帯には特別な財政支援をすべき、との主張が紹介され、さらに、日本のワーク・ライフバランスを改善し、既婚女性の雇用推進などにも言及しているところに日本社会の改善特徴が示されています。

貧困期間が長いほど深刻な影響

当然のことながら、子どもの貧困期間が長ければ長いほど、影響は深刻さを増します。日本と同じく、子どもの貧困に悩まされているニュージーランドでは、2013 年、全国の子供の 24%を占める 26 万人が相対的な貧困ライン以下で生活していました。貧困家庭の子どもの内、5 人中 3 人が少なくとも 7 年間貧しさの中で暮らしていることになります。

子どもの貧困は、急速に少子高齢化社会が進む日本にとって、将来の貴重な労働力の損失にもつながる、深刻な問題といえ、解決に向けた施策が、海外からも注目されています。

OECD 事務総長は、昨年開催された第 4 回世界フォーラムで次のように述べています。

『国民全員、特に子どもの、ニーズに応えようとしなければ、政策がより良い社会を構築することはできない。格差縮小に向けた闘いは、全ての人が満足した人生を送れるように平等な機会を確実にすることから始まる。特に幼少期からそうである必要がある』

この言葉を吟味するまでもなく、我が国の子どもの貧困は深刻な状況に瀕しています。

貧困対策、連鎖の防止

私事になりますが、長年勤めた川崎市を早期退職し、子どもの福祉事業を起業した私の現状認識はこれまでに述べた子どもの貧困の事実にあります。併せて、「居場所・学習支援・子ども食堂」に取り組む NPO 法人を新たに設立して、これまで培った経験と人脈をこの取組に活かせれば、ささやかな活動ではありますが、一歩でも半歩でも子どもたちを取り巻く環境を変えていけるのではないかと考えています。この国の未来を担う子どもたちの貧困に対策を講じ、貧困の連鎖を断ち切るために、事態を共有する皆さんと協働して行きたいと思います。

「学校事故対応に関する指針」は、本当に子どもの安全を守れるのか？

理事 大貫 隆志

2014年から「学校事故対応に関する調査研究」有識者会議は2014年4月からさまざまな学校事故における学校や設置者の対応のあり方を検討してきました。そして、2016年3月、「学校事故対応に関する指針」が文部科学省から公表されました。

当初の予定を大幅にオーバーして できあがった指針

「学校事故対応に関する指針」は、当初2015年3月には取りまとめ予定でした。しかし、委員の一部から、遺族からのヒアリングが必要だとの強い声が上がったことから、検討期間が大幅に伸び、16年3月の発表となりました。

ヒアリングでは、名古屋市柔道事故ご遺族、京都市立養徳小学校プール事故ご遺族、東日本大震災避難中に園児5人が死亡した石巻市の私立日和幼稚園事故ご遺族、同じく東日本大震災の津波で児童74人が犠牲になった石巻市立大川小学校事故ご遺族、全国学校事故・事件を語る会、NPO 法人ジェントルハートプロジェクトなどが意見を述べました。こうしたプロセスを経たことで、さまざまな事件・事故の実態を踏まえた指針ができあがりました。

現実と大きくかけ離れた

文部科学省による調査結果

この有識者会議と平行する形で、文部科学省の一つの調査結果が明らかにされました。それは、柔道事故や熱中症事故などの学校事故の家族・遺族の「原因の究明が不十分」「事実が明らかにされない」などの声がきっかけで行われたものでした。

この調査では、558件の回答のうち、「発生直後、家族への対応が適切に行えた」との回答が98%に上りました。しかし、これに先駆けてジェントルハ

ートプロジェクトが行った、自殺遺族などを対象とした調査では、「(調査に)全く納得できなかった」が80%を超えていました。

なぜこうした違いが生まれるのかを確認したところ、文部科学省の調査は「学校と被害家族・遺族の関係性が良好だった」レアケースとも言える事案を中心に調査していることが分かりました。そのため、調査に偏りがあることを文部科学省に申し入れるとともに、報道機関にもアピールしました。「このままでは偏った指針が作られる」と危惧したからです。

指針ができたことは一つの前進 より実効性を高めていく必要も

これまでは、学校事故・事件についての網羅的な予防・事後対応のガイドラインはありませんでした。

その意味で、この指針は、さまざまなタイプの学校事故に対しての、①事故発生の未然防止及び事故発生に備えた事前の取り組み、②事故発生後の取り組み、③調査の実施、④再発防止策の策定・実施をまとめたものであることが評価できます。

具体的には、事故の未然防止のための取り組みや、万一の事故の際に、子どもの安全を確保するための教職員研修を充実すること、事故が発生した時に管理職がいなくても組織的な対応ができるよう備えることなどの方針が示されています。

その一方で、なぜ今までこうした指針が作られなかったのか。もっと早くできていれば、救える命はあったのではないかという思いも起こります。

2013年、いじめ防止対策推進法が成立しましたが、これはいじめが社会問題化するきっかけとなったと言われる中野富士見中学校男子生徒自殺事件から、

30年以上もたってからのことでした。

指針とはいえ

各項目の表現には曖昧さも残る

もちろん、課題も残されています。指針全体を見渡して、気になるポイントをチェックしていくと25か所におよびました。特に、指針とはいえ具体的な対応・行動に関する記載が足りない部分が目立ちます。

日本型の経営は、阿吽の呼吸や暗黙知を重視する俗人型であり、アウトプットにばらつきがあり、外資系グローバルな企業は、業務が標準化されテンプレートもしっかりと決まっているために、誰がやっても同じ結果を出すことができると言われます。どちらがよいかはともかくとして、自治体や担当者によって恣意的に判断できる余地を残すことは、好ましいとは思えません。

例えば、指針P12の

「2-3 初期対応終了後の取組」には、「基本調査等を踏まえ、学校の設置者が必要と判断した場合には、外部専門家が参画した調査委員会を設置し、必要な再発防止策を検討することを目的とした『詳細調査』を行う」とあります。

いったいどのような基準に基づいて「必要」「不要」の判断を行うのか、それをはっきりしておかないと「学校設置者」が勝手に判断を下すことができちゃいます。本当にその判断が適切であるかを客観的に確かめるための「物差し」が必要です。そのためにも、判断の基準を具体的に定めることで、判断が適正であったかを第三者が確認できるようにしておかなければいけません。

児童保護のあり方を明確に示している イギリス柔道連盟のガイドライン

「全国柔道事故被害者の会」のWebサイトには、イギリス柔道連盟 (British

Judo Association) が「児童保護の方針・手続き・ガイドライン」としてまとめた『Safe landings (安全な着地)』が掲載されています(全国柔道事故被害者の会 翻訳)。

これには、どのような行為が児童にとって虐待となるかが詳細に記されています。例えば心理的虐待の部分では、

- 公的な場や私的な場で繰り返しネガティブなフィードバックを与える。
- 若い選手の進歩への努力を繰り返し無視する。
- 若い選手に能力を超えたレベルの成績を繰り返し要求する。
- 勝利の価値を強調しすぎる。
- 若い選手に、価値がないと感じさせたり、コーチや親、その他の人々の期待を達成した場合のみ価値があると感じさせる。

と例示しています。こうして具体的に記してあれば、その行為が虐待に当たるのかそうでないのかを、客観的に公正に判断できます。「学校事故対応に関する指針」においても、判断基準となる明らかな例示をして欲しいと思います。

盛り込まれた新しい視点

「被害児童生徒等の保護者への支援」

被害児童生徒の保護者に対する支援を具体的に記載していることが、この指針の特徴です。

例えば、P21の「5 被害児童生徒等の保護者への支援」では、

- 学校や学校の設置者に対する被害児童生徒等の保護者の要望が異なる場合は、それぞれの被害児童生徒等の保護者の意向を十分に踏まえながら、コーディネーター等を活用し、調整を図るよう努める。

と記載されています。

事件・事故発生時に学校側が迅速な対応を怠るケースでは保護者と学校との間に対立関係が生まれることが多々あります。こうした場合に、関係調整を取り持つコーディネーターの存在が有効

であることはたびたび指摘されていますが、問題はこうした調整に必要な知識や経験をもつ人材がごく限られていることです。

指針に記されたことを実行していくためには、こうした人材をどう育成するか、予算措置をどうするのか、より具体的な検討が求められます。

学校は危険な場所

その認識が安全な学校を作る

児童に対する虐待は、おもに家庭内で起こります。子どもにとって家庭は、必ずしも安全な場所ではないと言えます。そして家庭以外で子どもにとって危険な場所はどこでしょうか。それは、学校に他ならないのです。

子どもたちの間にはいじめが起きます。暴力、傷害、恐喝に発展することもあります。こうした問題に教員が適切に対応できない場合には、不登校や精神的な疾病、自殺のリスクも増大します。体育や部活動では、熱中症、過度な練習の強要による怪我や死亡事件が起きています。教員からの暴言・暴行による不登校やPTSDも、残念ながらめずらしいことではありません。

学校が子どもの安全に対するもっとも大きなリスクになっていることを、他ならぬ学校、保護者が認識することから、学校事故対応は始まるのではないのでしょうか。

まず学校を安全な場所にするのが事故対応の基本中の基本

指針 P5 には、

(2) 安全教育の充実

- 事故発生の未然防止の観点から、児童生徒等の安全教育の充実を図ることも重要である。

として、

イ 日常生活の中に潜む様々な危険を予測し、自他の安全に配慮して安全な行動をとるとともに、自ら危険な環境を改善することができるようにする。

とあります。

先に挙げたような学校でのリスクを前提とすれば、「日常生活の中に潜む様々な危険を予測し、自他の安全に配慮して安全な行動をとる」とは、学校に行かないことを意味してしまうのではないのでしょうか。

「学校事故対応に関する指針」が想定する「事故」には、「反省文を書くまで約8時間も指導を続け、一方的に停学処分を決めた結果としての自殺」は含まれていないように思えます。この指針が、真に学校事故・事件についての網羅的な予防・事後対応のガイドラインとなるよう、働きかけを続けたいと思います。



【関連 URL】

「学校事故対応に関する指針」の公表について (通知)

http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1369565.htm

児童生徒の自殺が起きたときの背景調査の在り方について (通知)

(2011年6月1日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1318820.htm

「子供の自殺が起きたときの背景調査の指針」の改訂について

(2014年7月1日)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/063_5/gaiyou/1351858.htm

学校保健安全法

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S33/S33HO056.html>

講演を聞いた子どもたちの感想文をご紹介します

理事 篠原 宏明

私たちジェントルハートプロジェクトは、講演の直後に感想文を書いています。その中から、皆さんにもお読みいただきたい感想文を、随時ご紹介していきたいと思います。今回ご紹介するのは、すべて小森美登里さんの講演後の感想文です。

【小学四年生 女子】

今日、お話を聞いて私はすごく感動しました。その理由は、小森さんは娘さんを亡くしているのに、こうやって講演会まで開いて頑張っているからです。

私は娘さんの書いた詩も歌にも感動しました。その協力してくれた人にも、私は感動しました。小森さんは、娘さんがお亡くなりになられて、すごく心が傷ついたと思います。でも、小森さんの娘さんの死は無駄では無かったと私は思います。なぜなら今、こうやって講演会を開いて「生きていたくないなあ」と思っていた人がもし居たら、それを聞いてやっぱまだ生きていこうと思ったり、いじめをしていた人も「いじめをしていたら、殺そうと思っていなくても、自分が殺してしまうかもしれないから、やめよう」と思うかもしれないからです。

小森さんは、自分の娘さんだけではなくて、違う人のことも考えて講演会を開いてくれていることにも、改めて感動してしまいます。私は、生きていくということは、無駄ではないと思いました。今まで私は、大人の考えはいつも正しいと思っていました。でも時には間違っていることもあるということを、今日初めて知りました。なので、お父さんとお母さん、そして妹にも、今日の話をお伝えしたいと思っています。

【中学生1年生 女子】

いじめをテーマにした講演は、今まで学校で何度も聞いたことがあります。

いつも正直言ってふつうの講演会でした。でも、今日聞いた話には、とても説得力がありました。実際にいじめでお子さんを亡くされた方が話してくださったので、いつもとは全く違う気持ちで聞くことができました。

今日は、いじめってなんだろうって思いました。人を死にまで追いやってしまうなんて、怖くて怖くてしかたがありません。

私が小学校のとき、短期間だけですが、私も嫌がらせを受けたことがあります。学校の違う子からの嫌がらせですが、もう会いたくない、その子の居場所には行きたくないと思っていました。自分が嫌がらせを受ける前までは、なんでみんな親にすぐ相談しないんだろう?と思っていました。いざ自分が嫌がらせを受けると、親に言えない気持ちはよく分かったように思います。

親に打ち明けたのは、しばらくたってからです。そしてそのクラブを辞めることにしました。でも、今でもその子たちに会うと少し怖いんです。だから、その時のことは今でも忘れることが出来ません。

そんな嫌がらせを受けた私だからこそ、相手の気持ちは考えなくちゃいけないんだと思います。いじめの怖いところは、やっている方があまり気付いてないことだと思います。もしかしたら私も今、誰かの心を傷つけているかもしれないかもしれません。自分では軽い冗談のつもりで言った言葉が、相手にとってはとても重く、傷つく言葉なのかもしれません。

私は、いじめをする側には絶対になりたくありませんし、なりません。

いじめがこの世から無くなるのを願っています。

【中学生1年生 女子】

私もいじめを受けた経験がありま

す。それは、私が小学校5年生の時でした。私がいじめられていた人の味方をしたところ、私自身がいじめのターゲットになってしまったのです。

毎日無視をされ続けて教室ではいつも一人。誰にも相談できず、学校に行くのが本当に辛かったです。「学校なんて行きたくない」とずっと思っていました。行かなかったらもっといじめがエスカレートすると思うと、行くしかありませんでした。

ある日、死ねば楽になると思って、気付いたときには右手にカッターを持っていました。でも私に死ぬ勇気はありませんでした。

そんなとき一人の子が私に声を掛けてくれました。それをきっかけに先生に相談したら、いじめは解決しました。今思えば、あの時本当に死ななくて良かったと思っています。まだまだやり残したことがいっぱいあるのに、もしあの時に死んでいたら、そんなことも出来なくなる。そう思うと、今でも怖くなります。

だから、私は今日の話聞いて思ったことが二つあります。

一つ目は、嫌なことをされたりしたからと、相手をいじめたり無視をしたりするのは、絶対にダメだと思います。そんなことをしても、何も解決しないし、誰もうれしくないからです。

二つ目は、毎日「幸せ」を感じながら生きるということです。どこで、誰がどうなってしまうか分からないからです。もしかしたら、それは明日かもしれないし、今日かもしれない。毎日笑顔で過ごせるようにしたいです。そして、産んで育ててくれているお母さん、お父さんに感謝しながら「今」を生きたいです。さりげなくでもイイ、「ありがとう」「ごめんさい」「大丈夫?」が言えるとイイなあ・・・

◇活動のご報告と今後の予定◇

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2016/6/1	滋賀県立安曇川高等学校	滋賀	高島	400
2016/6/2	野田市立二川中学校	千葉	野田	280
2016/6/3	梅光学院大学 教師塾	山口	下関	110
2016/6/3	野田市立福田中学校	千葉	野田	200
2016/6/7	関東学院中学校	神奈川	横浜	300
2016/6/8	長岡市立与板中学校	新潟	長岡	350
2016/6/9	倉敷市立琴浦南小学校	岡山	倉敷	90
2016/6/10	備前市立吉永小学校	岡山	備前	85
2016/6/14	浜松市立新原小学校	静岡	浜松	380
2016/6/16	川崎市立今井小学校	神奈川	川崎	340
2016/6/16	芦北水俣学校保健会	熊本	葦北郡	90
2016/6/16	宇河地区中教研生徒指導・教育相談部会	栃木	宇都宮	170
2016/6/17	大田区立嶺町小学校	東京	大田区	260
2016/6/22	豊島学園	東京	豊島	720
2016/6/25	藤沢市子どもをいじめから守る啓発講演会	神奈川	藤沢	400
2016/6/27	千葉県立柏南高等学校	千葉	柏	380
2016/6/30	光泉中学校	滋賀	草津	330
2016/6/30	霧島市立横川中学校	鹿児島	霧島	130
2016/6/30	鎌倉市学校・警察連絡協議会	神奈川	鎌倉	100
2016/7/1	金沢市立泉中学校	石川	金沢	430
2016/7/3	鶴見区更生保護協会	神奈川	横浜	570
2016/7/4	野田市立川間中学校	千葉	野田	330
2016/7/5	関西学院高等部教員研修	兵庫	西宮	50
2016/7/7	野田市立北部中学校	千葉	野田	500
2016/7/8	霧島市立木原中学校	鹿児島	霧島	40
2016/7/9	霧島市立国分中学校	鹿児島	霧島	650
2016/7/14	千葉県立流山高等学校	千葉	流山	650
2016/7/19	山口県立宇部中央高等学校	山口	宇部	220
2016/7/22	茨木市人権教育夏季研究集会	大阪	茨木	1,000
2016/7/29	霧島市人権・同和教育基礎講座	鹿児島	霧島	120
2016/8/1	岡山市福南中学校区人権教育研修会	岡山	岡山	70
2016/8/8	三重県松阪地区教職員夏期講習会	三重	松阪	80
2016/8/10	和歌山県立和歌山北高等学校西校舎	和歌山	和歌山	480
2016/8/18	岩国市小中学校夏季管理職等研修会	山口	岩国	120
2016/8/20	霧島市人権フェスタ	鹿児島	霧島	500
2016/9/3	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	120
2016/9/7	吾妻郡PTA懇談会	群馬	吾妻郡	50
2016/9/12	東海大学付属市原望洋高等学校	千葉	市原	680
2016/9/16	茅ヶ崎市自殺対策事業講演会	神奈川	茅ヶ崎	70
2016/9/28	豊島学園	東京	豊島	720
2016/10/5	智辯学園奈良カレッジ	奈良	香芝	790
2016/10/13	防府市立大道小学校	山口	防府	150
2016/10/14	美作市立勝田小学校	岡山	美作	170
2016/10/22	川崎市立向丘中学校	神奈川	川崎	700
2016/10/25	美作市立大原中学校	岡山	美作	170
2016/10/26	備前市立日生東小学校	岡山	備前	200
2016/11/10	横浜市立日吉台西中学校	神奈川	横浜	520
2016/11/19	鹿沼市青少年育成市民会議	栃木	鹿沼	100
2016/11/24	小樽市立望洋台中学校	北海道	小樽	180
2016/12/4	花巻市人権講演会	岩手	花巻	350
2016/12/5	周南市立小中高PTA連合会研修	山口	周南	
2016/12/6	柏市立柏第五中学校	千葉	柏	650
2017/2/4	江戸川ロータリークラブいじめ防止例会フォーラム	東京	江戸川	400



◇橋がかかる◇ ひととひととの出会い、そこにかかる橋

このコーナーでは、毎回、ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由に書いていただいています。

今回は、ここねっと東日本大震災緊急こどもサポートチーム代表の佐藤秀明さんにお話をしました。

大川小学校全体保存のために奔走したこどもたちについて

ここねっと東日本大震災緊急こどもサポートチーム 代表 佐藤 秀明

津波に遭った大川小学校を遺すために大川小学校の卒業生で結成した「チーム大川」…実は、結成したものの、悲しみと不安と自己否定による混乱の連続でした。

大川小学校の卒業生の学習支援をメインにしたメンタルケアとストレスマネジメントを2011年から4年続けてきた時のメンバーが集い、大川小学校を遺したいという意見表明することを決意。チーム大川を結成しました。

2014年の4月に宮城県立こども病院での意見表明を皮切りに、2015年の3月の大川復興協議会主催の地域集会での意見表明と仙台で行われた国連防災会議市民フォーラムでの意見表明に取り組みました。これは、子どもの権利条約をベースにした意見表明ととらえることもできますが、失われた命と自分の命を守るための行動だったように感じます。それは決して悲しみや苦しみを乗り越えての行動ではなく、悲しみと苦しみの真っただ中において、そのどん底からの叫びだったのです。

「チーム大川」にとっての大川小学校は、遺すべきものであるものの、大川復興協議会は、当初遺さない方向で協議を進めていました。ここが、チーム大川にとって大きな壁でした。そこで我々は、こどもたちの遺すための検討会に大川復興協



議会の事務局長さんと役員の方にご出席いただき、意見交換をする場を設ける対応を設定しました。この時のメンバーは、こころもからだもぎりぎりのところでの活動に自分を見失いそうになりながら苦しんでいましたが、いざその時が来ると、相手の言葉や考えを受け止めることができたのが印象的でした。そこに至るまでの覚悟に費やしたエネルギーと涙は想像に難くありません。そして、2015年3月18日の地元で開催された大川小学校を遺すか壊すかの全体協議会での意見表明に全員で参加することができたのです。

ここでは、大川小学校を遺すかどうかについての大川地区の皆さんの賛否を取り、大川復興協議会の意見の集約として、市への要望書に反映させることになっていました。結果は、遺すという賛成票が反対票を上回りました。その間、とても耐えられないマスコミの一方的な攻勢や無理な取材がありましたが、こどもたちははていねいに向き合い、相手を否定することなく対応する姿があり「チーム大川」の覚悟が垣

間見ることができました。そして、国連防災会議市民フォーラムへ連続しての参加。エネルギーはいまにも底を尽きそうな状態でした。そんな中、二つの会議に参加しての意見表明は、多くの参加者の支持を得ることができました。さらに、国際子ども防災会議への参加の機会を得て、世界に発信するまでに大きく成長を遂げることになったのです。

いま、メンバーは、次のステージ、『大川小学校をどのように遺すことができるか』に向けて動き始めようとしています。一人一人が、自分の抱える悲しみと苦悩に向き合い、自己の存在を確かめながら、仲間との共感できる信頼をよりどころに…

